

# 表紙 の 説明

## 広島城 (復元された二の丸と復興天守)について



表紙上段の画像は、昭和33(1958)年に構築した鉄骨鉄筋コンクリート造の復興天守を西側から水堀を挟んで地上レーザスキャナで計測した鳥瞰図です。その一部を動画的に表現したものがこの3画像です。広島城が鯉城(りじょう)とも呼ばれる優美な五層天守の姿が表現されています。下段の画像は南側から地上レーザスキャナで捉えた天守正面の画像です。南渡櫓の端部と望楼型天守の構造がよく分かります。

### ■表紙画像のご提供先

「地上型レーザによる広島城の復興天守画像」

リーグルジャパン(株)

〒164-0013 東京都中野区弥生町5-11-29 フジビル2F

http://www.riegl-japan.co.jp Tel: 03-3382-7340

使用機器: RIEGL社製VZ-440

(ステップ角度0.02°(上段画像), 0.04°(下段画像))

広島城は、別名鯉城(りじょう)と呼ばれています。

鯉城の由来は諸説あるようですが、元々「己斐(こい)」という地名があり、己斐に臨む海辺一帯を「己斐浦」と呼ぶようになり、そこに築城したため「鯉城」という名称がつけられたようです。

広島城は、太田川河口のデルタに築かれた平城で、広島市街地の中央北部に位置しています。戦国時代の中国地方の雄であった毛利輝元が天正17(1589)年から10年の歳月をかけ、太田川を外堀に三重の堀で城郭を形成しました。方形の本丸と、その南側に堀を挟んで狭い二の丸を配し、本丸御殿の北西に五層の天守とその東と南に三層の小天守を連結していました。城郭の縄張りは聚楽第を模したと言われています。

毛利氏は、慶長5(1600)年の関ヶ原の戦いの敗北により、周防・長門二国に減封され、その後には福島正則が入城しました。元和3(1617)年に福島氏が改易になり、和歌山から浅野長晟が移り、以降、浅野氏が12代続き、明治維新を迎えました。

広島城の本丸前面には本丸の出入口を防備する表門馬出と呼ばれている方形の小区画があります。ここが二の丸です。表門馬出は本丸出入口(虎口)を嚴重に固めるための防御施設で、土塁・石塁と濠により方形または半円形に形づけられます。表門馬出には表門(図-

1)、平櫓(図-2)、多聞櫓および太鼓櫓(図-3)が平成6(1994)年に復元されました。

表門(橋御門)を入り、二の丸である表門馬出を抜けると本丸に架かる土橋があります。土橋を渡ると東西約173m(95間)、南北約218m(120間)の本丸が位置しています。本丸は北側の一段高い上段と南側の一段低い下段に分けられます。下段は馬場跡、上段は本丸御殿跡です。本丸の四囲の要所には櫓跡が残り、本丸上段の西側・北側・東側には帯曲輪が形成されていました。本丸北西端为天守となり、文禄年間(1592年)~慶長年間(1599年)頃に完成したようです。

天守はその東側と南側に小天守を連結した複合連結式で、松本城と同じ構造のものでした(小天守は明治初期に取り壊されました)。五層の望楼型天守で、高さ約12mの天守台上に約27mの天守が聳えていましたが、昭和20(1945)年8月6日の原爆投下で天守は破壊されました。天守台の石垣は文禄~慶長年間の石垣手法を伝える貴重な遺構となっています。

昭和33(1958)年3月に外観を往時の天守に模した鉄筋コンクリート造の五層の復興天守を構築しました(図-4)。水堀(濠)に映る広島城の復興天守(図-5)や石垣には、壮大優美な往時の鯉城の面影を見ることができます。

(瀬戸島政博)



図-1 復元された表門(筆者撮影)



図-2 復元された表門と平櫓(筆者撮影)



図-3 復元された多聞櫓と太鼓櫓(右)(筆者撮影)



図-4 復興された天守(筆者撮影) 図-5 復興天守の遠景(筆者撮影)